



筑波大学特任教授 小笠原 正明 先生

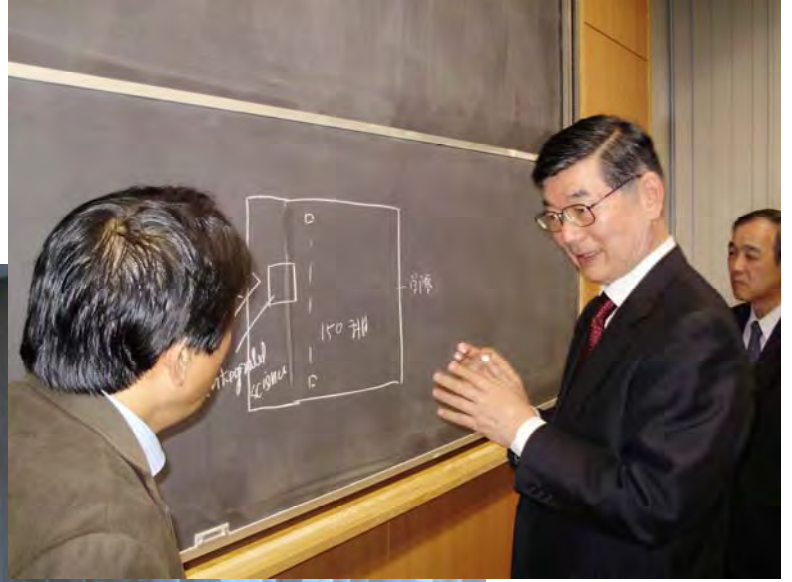
教育人間科学部主催2008年度FD研修会開催

—「平成20年度の中教審答申とFDの義務化」—

講師 筑波大学特任教授 小笠原 正明 先生

2008年11月19日に開催された2008年度FD研修会は、小笠原正明・筑波大学特任教授を講師にお迎えし、「平成20年度の中教審答申とFDの義務化」と題して行われた。中心的課題は、2008年の中教審答申の目標「学士課程の構築」である。とりわけ教養教育と専門教育の間に位置する「専門基礎教育」の充実が要請される近況に対し、FDで何が出来るのかという問題にスポットが当てられた。

講師の小笠原氏によれば、学士課程の種別化の必要性は、既に2005年の「将来像答申」からも、大学院教育の役割の明確化を目指した同年の「大学院答申」からも指摘されていた。氏はそれと2008年度の中教審答申の間に浮上した論点を説明するため、まず学士課程と大学院課程の役割を整理した見取り図を提示する。そして専門的知識の修得が大学院に移行する傾向の中、国際標準となりつつある新たな「学士力」をつける上で、基礎的学力と専門的知識の橋渡しをする「専門基礎教育」が、日本の大学の弱点として浮かび上がってきた点を指摘した。氏によれば、専門基礎とは「直接専門に連なる科目」と「直接関係しないが必須の素養」であり、体系化された「アカデミック・ディシプリン（学科）」がそれにあたるという。



講演後の
ディスカッション

会場風景

そして氏はその諸学の体系的を維持した教育こそが、専門的で細分化されていく日本の学術分野と違う特徴であるとし、この点を生かした教育の実践例として、英米の大学で行われているカリキュラム編成と、必要な人材の配置体制、それによって生まれる「専門基礎教育」の効果を、日本のカリキュラムの現状と比較しながら提示された。

しかるのちに氏は、現在FDに求められている役割の問題に立ち戻り、「職業規範」、「体系的な教育理論」という大学教育の基本的な「作法」についても、FDがなお有効な研修の場である点を確認した上で、FDの中心にある「学習戦略・教育技術」について、従来の「教え込み型」から「(教員と学生の)双方向型」「(大人数が能動的に参加できる)シアター型」に移行すべきこと、そのためにディシプリンを挙げた横断的なコラボレーションが必要であること、そして学協会とコンソーシアムをそのために活用すべきこと、を結論された。

これに対して出席者の側からいくつかの質問が出された。

- ①「こうした方向でFDを義務化したとき、主体になりうるのはやはり大学ではないか」
- ②「1人で講義を受け持つ日本の現体制では、シアター型の授業の責任を持つのは難しいのではないか」
- ③「専門基礎教育は従来の教養課程の延長として考えられるか」
- ④「FDの義務化は学部単位ではなく、全学で取り組むべき課題ではないか」
- ⑤「この問題に関する講座単位での取り組みを進めていく上で参考になった。ただ経験の適用は世代に留意する必要もあるのではないか」
- ⑥「科目によって専門の差が出る状況にどう対処したらよいか」

これらの質問に対し、小笠原氏は日本と英米の大学制度に違いがあることを認められた上で、英米で起こった変化が日本にも起こりつつあることは確かであり、それに対して形式にこだわらない柔軟な対応を取るべきことを進言された。

第3回FD授業公開：

「地域社会論」

11月11日（火）1時限 K-31

〔授業者の思い〕

地域社会に目を向ける

きっかけづくりの場を目指して

：藤原真史（共生社会講座）

課程共通専門科目「地域社会論」は、私たちが暮らす地域社会が抱えるさまざまな課題に受講生が関心を持つきっかけとなることを目指しています。毎年、現実社会の動向に対応してテーマや事例に修正を加えていますが、条件不利地域政策、コンパクトシティ、地域公共交通、国土政策、協働といったテーマを、それぞれ2～3回分の授業時間を割り当てて取り上げています。

授業は、何れのテーマについても当該問題に関する基本的な知識のPowerPointを用いての解説、関連する映像資料の視聴、新聞記事の講読を柱として構成していますが、基本的には担当教員の話を中心とする講義形式で進めています。そのため、いわゆる参加型授業のような特色ある取り組みと言えるようなものはないのですが、新しいテーマを取り上げる最初の授業で映像資料を視る時間（適当な資料がなければ新聞記事を読む時間）を設けてその問題に対する受講生の関心を高めるべく努めていること、（一つのテーマを複数回に分けて取り上げるため）毎回の授業の冒頭で前回の講義内容の確認をした上で全体の流れの中での本日の講義の位置づけを提示すること、講義中に受講生に対して何度か簡単な問いかけをして教室を巡回しつつ発言を引き出す機会を設けること、資料は受講生に配布したもの（新聞記事等）を含め原則として全てスクリーンに映し出して全員で見ながら説明を行うこと等、過去の授業評価アンケートで寄せられた受講生の意見等も踏まえ、自分なりの改善・工夫はしています。

授業を組み立てる際に意識しているのは、「理論と実際」（敬遠されがちな理論的な話も踏まえた上で実際の具体的な事例を考える習慣を身につける）、「考えさせる授業」（授業で紹介する様々な事例をもとに、受講生自身が「どう考えるか」に繋げていく）、の二点ですが、特に後者はまだまだ道半ばです。

授業を公開するのは、かつて学生時代に某予備校で講師をしていた時以来のことで正直緊張しましたが、終了後の討議やアンケートでご意見を頂き、励みとなるお言葉に喜ぶとともに今後の宿題（改善・工夫すべき点）を具体的に認識することができました。本当に有り難うございました。（了）



〔授業参加者の感想〕 教員・学生アンケートより（参考になった点等、一部を抜粋）

- ◎ PowerPoint がとても分かり易く整理されている。
- ◎ 身近で新しい資料「甲府活性化に必要な機能についてのアンケート」を利用するなど、学生が関心を持ち易い切り口を工夫していた。
- ◎ 学生からの発言を喚起することに多くの労力をさいていた。
- ◎ 情報量の多さにもかかわらず、情報の重要性にメリハリをつけて学生に無用な負担をかけさせない点。
- ◎ まとめ方、授業の目的と結論がしっかり結合している。
- ◎ DVD など、メディアの複数併用によって理解を促している。
- ◎ いわゆるテキスト的な基礎知識を伝達する部分は大変簡潔で精選された内容にするよう工夫されており、これ以上の工夫は望めそうもありませんが、この様な固い内容を制限された授業の枠内で充実させるための画期的な方法がないものかと常々考えています。
- ◎ 宿題、事前に課題について問題意識を持って臨んでいたところ。



第9回全学FD研修会に参加して 国際文化講座 奥村直史

9月1日から2日にかけて富士吉田での泊りがけFD研修会に参加した。「FD研修会」は全国の大学で近年盛んに行われるようになっていく試みであるが、宿泊をとまなう全学の研修会であるから本格的である。学生、教員、職員が早朝バスに乗り込み、甲府キャンパスを出発し富士吉田へと向かった。

富士Calmという研修施設に到着し医学部キャンパスの方々と合流すると、さっそくセッションが始まった。テーマは「分かち合いのグループワーク」である。伊藤美佳先生指導の下、まずはグループ分けが行われた。機械的にグループをつくるのではなく、そこには工夫が凝らされていた。学生と教員が二手に分かれ、誕生日が早い順に1月生まれの人から並んでいくという趣向だ。当然参加者は、互いに「何月生まれですか?」とか「それで何日でしょうか? ぼ

くのほうが早いですね」などと会話を交わすことになり、自然と打ち解けていくことになった。そればかりでなく、学生と教員どちらが早く並び終わられるか競争だとのアナウンスがあったので、平静を装いながらも学生に負けてはならじと頑張ってしまうのであった。

学生と教員混成のグループが無事出来上がると、「クルーザー物語」という短いエピソードをグループごとに読んだ。今回の研修で一番印象深かった共同作業である。暴風にみまわれて無人島に避難した5人の登場人物それぞれの言動、行動から判断し、どの登場人物に一番好感をもてるか、を決めていく「グループワーク」である。まずは個人の順位を決め、そのあとグループでの統一見解をまとめる。この作業にも工夫が凝らされていた。日永龍彦先生から付箋が配布され、順位付けの理由をその付箋に書き、登場人物が表となった模造紙の上に張って順位付けをしていくのである。ほかの人の結果を見て、疑問点やコメントなどをまた付箋に書き、該当箇所に張っていく。これで討論の素材が滞りなく「分かち合い」できるのだ。そして自分とは違う判断や考え方があるのだと、多少の驚きとともに知ることになる。その後、それぞれの疑問点やコメントについて話し合い、グループでの総合的順位を携えて全体での発表に挑んだ。誰もが意見を出しやすいのがこの方法の優れた点であり、多少の変更を加えて自分の授業でも取り入れさせていただいている。

二日間の研修で、以上が私にとってのメインイベントであった。学生の時以来の相部屋も新鮮で、工学部の同年代の先生と自分の専門外の話ができたのも楽しかった。帰りのバスは打ち解けた雰囲気、一晩泊って皆で何かするのもいいものなのだ、と考えるようになった。来年度の全学FD研修会への参加をお勧めします。

◆編集後記◆

FD委員会主催の大方のイベントがおわりました。一同わずかずつでも改善を図っているつもりですが、すぐには結果がでないようです。来年もよろしく願い申し上げます。良いお年を……。 (T・M)

教育人間科学部FD委員会：村松俊夫・武藤秀夫・古家貴雄・古屋義博・皆川卓